

# 高等学校 国語科における 探究的な読みの学習に関する研究

学籍番号 199345

氏名 正木 結貴  
主指導教員 土山 和久

## 1. 背景

### 1.1 研究の背景

平成30年度に発表された『高等学校学習指導要領 総則編』において、「主体的・探究的で深い学び」に向けた授業改善が示され、教育活動全体においてアクティブ・ラーニングの導入が求められている。中でも文部科学省は主体的・協働的な学びとしての「探究的な学習」による授業展開を行うよう示している。しかし、高等学校においてはこのような学習を毎回授業の中に組み込んでいくには授業時間数や受験指導という面からも難しく、やはり「教材の読み取り」が授業の中心になっているところが多く、広く浸透しているとは言えないのが現状であり、国語科においても、「教材の読み取り」が中心であり、アクティブ・ラーニングが広く行われているとは言い難い。では、このような状況の中でどのようにして国語科の授業、特に読みの学習にアクティブ・ラーニングを取り入れれば良いのだろうか。本研究は以上の問題意識を背景とするものである。

### 1.2 研究の目的と方法

本研究ではアクティブ・ラーニングの中でも主体的な学習を促す探究的な学習について着目し、どのようにして読むことの学習に取り入れることができるのか、またこの学習により生徒達の読みがどのように深まり授業が活性化するかを、実践研究から明らかにすることを目的とする。方法としては、多義性を持つテキストと多様な文学探究のアプローチの手法、対話的な学習を組み合わせる授業を構想、実施。その結果から分析を行うものとする。

## 2. 研究の方法

本研究では学習者に主体性を発揮させる仕掛けとして、自らの問いを、各文学探究のアプローチを用いながら持たせることを大切にしたい。また、多様なグループワークによる協働的な作業を導入することにより対話性を育もうとした。

### 2.1 作家作品論的アプローチと探究のサイクルを用いた探究的な学習(基本学校実習II)

基本学校実習では、探究的な学習のサイクルと指導教諭の授業展開を基に、作家作品論的アプローチで課題解決を行う授業を構想、実施し、その結果から考察を行った。

### 2.2 テキスト論的アプローチとジグソー型学習を用いた探究的な学習(発展課題実習I)

発展課題実習Ⅰでは、指導教諭の授業目標及びコンセプトを引き継ぎつつ、文章に寄り添ったテキスト論的アプローチを用いて授業を構想、実施し検討した。

### 2.3 文化論的アプローチとリテラチャー・サークルを用いた探究的な学習(発展課題実習Ⅱ)

発展課題実習Ⅱでは、古典という教材の特性を活かし、文化論的アプローチから課題を作成させた。また課題解決にむけた話し合い活動の導入以外にも、文学を用いたコミュニケーションの展開についても着目し、授業展開を構想、実施、分析を行った。

## 3. 研究の成果

実践研究から、文学を用いた探究的な学習を活性化するための要件として作家作品論的アプローチやテキスト論的アプローチ、文化論的アプローチといった文学探究のアプローチの多様性、多義性を持つテキスト、そして学習者自らの問いが重要になるということ、これらの要件が組み合わさり、絡み合うことで探究は活性化し、学習者の読みに広がり、深まりが生まれるということを示すことができた。

また、文学探究の多様なアプローチと対話的な学習を組み合わせる授業の中で、学習者が作者と、テキストと、そして同級生という他者と対話し、探究しながら文学の読みを深めていく姿が見られたり、様々なアプローチや他者との対話を通して、作家に寄り添うことや作品を読み深める中で生じるズレと出会い、そこに問いをたて、問いに対する向き合い方の違い、考え方の違いにも対話するなかで気づく学習者の姿をとらえることができた。これらのことから、対話的な学習を取り入れることには探究の方向や広がり、深まりのバランスを学習者がとれること、文学に向き合う楽しみを共有できる点、そして文学に対する自分の関わり方に気づくという自己認識を促す点において意義があるということを示すことができた。

## 4. 反省と今後の課題

最期に、本実践研究の反省を以下にあげ、これらを今後の課題としたい。

まず、指導者の力不足から学習者に十分な探究を促せなかった点である。話し合い活動をさせるためには自己や他者の意見を批判的にみて意見する練習を事前に行わせることが必要であるということを示すことができた。また、アプローチの特性や教材特性を活かしきれず、テキストとの対話を通じたメタ読者としての気づきを与えることができなかった。

次に、安定を求め予定調和な学習が時に展開されていた点。これは指導者、学習者の両方に該当するものであるが、明確な答えを得ないことに対するストレスに耐える資質に乏しいと、安定を求め未知への探究に踏み出しにくい。このストレスに耐える術はどのようにして身に付ければ良いのだろうか。

最後に、本研究では実践的に授業開発は行ったものの、それを日々行われる教育活動の中にいかにして組み入れることができるかについては言及できていない点である。

テキストや探究させたい方向に合わせ、アプローチの方法を選択すること、時にはアプローチの方法を組み合わせることで探究させることが実践の場では求められるが、教科書教材ではどのようなアプローチを用いて、または組み合わせることで探究を促すことができるのだろうか。また、本研究では時間の制約が少なかったが、学校現場では授業時間数が限られている。そのような制約の中でどれほどの探究ができるのだろうか。